

〈連載〉

ドイツの建築・すまい随想

第5回

世界遺産の町クヴェットリンブルク (Quedlinburg)・木骨建築が並ぶ町

お茶の水女子大学 名誉教授
(株)木構造計画 代表取締役

田中 辰明

□ ベルリンから西南250キロのドイツ・ハルツ地方。緩やかなすそ野を広げるブロッケン山 (1142m) のふもとに、中世の面影をそのまま残すクヴェットリンブルクの町がある。美しい木骨建築の町並みを歩くと古いヨーロッパへの郷愁にひたることができる。外部に木の枠が露出する木骨造りの建物は市内に1200軒。狭く曲がりくねった道を歩けば、中世の町に迷い込んだような気分を味わえる。14世紀から19世紀まで6世紀にわたる木骨造りの建物を見て回れば、世紀ごとの異なる木組みの装飾を比べられる。当初の素朴な造りが、16世紀のギルド (中世欧州の同業者組合) の威光を表す凝った木彫りの装飾付に代わる。ドイツの木組み住宅の特徴としてこの町の住宅でも三角受木 (Konsoledreiecke) が使用されている。これは柱の根元を固めるために用いられ、いろいろな模様や絵が描かれたものである。これを見ると専門家は何世紀の住宅か判断が付くそうである。

□ クヴェットリンブルクはドイツ史との関係も深い。神聖ローマ帝国の初代皇帝、オットー大帝の父君であるハインリッヒ1世が即位した土地であり、城にその墓がある。12世紀半ばまで神聖ローマ帝国の首都として栄えた町である。

□ 町の中央にあるマルクト広場に入るとおとぎの国に迷い込んだようである。丘の上の聖セルバチウス聖堂はお城のような堅固な建物で威圧感さえある。12世紀の建造物でロ

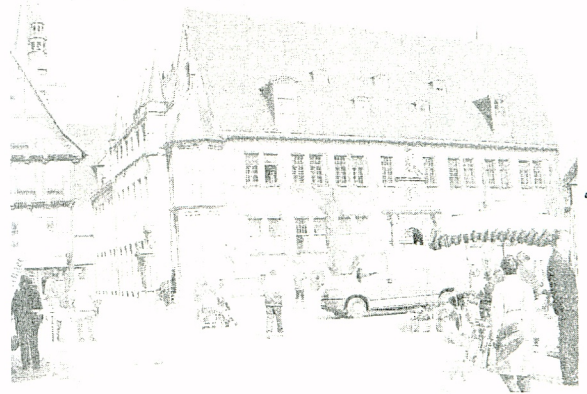


写真1 マルクト広場の前に建つ旧市庁舎

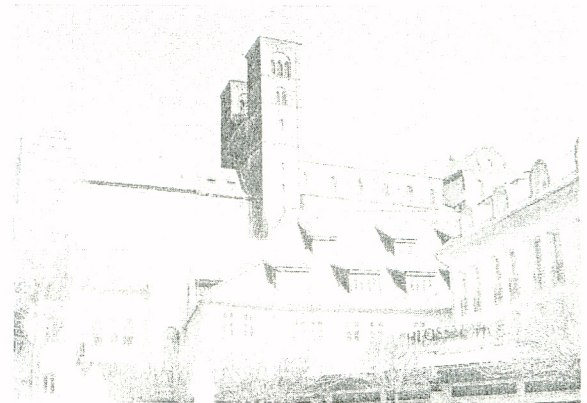


写真2 丘の上の聖セルバチウス聖堂

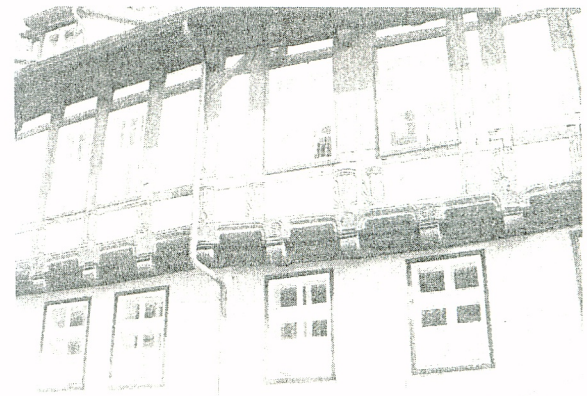


写真3 三角受木の使用される前は垂直の受け木が使われた。

マネスク様式ではドイツ最古の教会といわれている。城から下を見渡すと一面に赤茶色の波をなす屋根が広がる。そしてその先に魔女伝説のあるブロッケン山、ハルツ山脈が繋がる。ゲーテがハルツ紀行を書いたのもここである。筆者が1972年にベルリン工科大学にいた頃、ベルリン工大の仲間とイースター休暇にハルツ山脈を歩いたことがあった。ゲーテの名作ファウストに「イースターの散歩」の話が

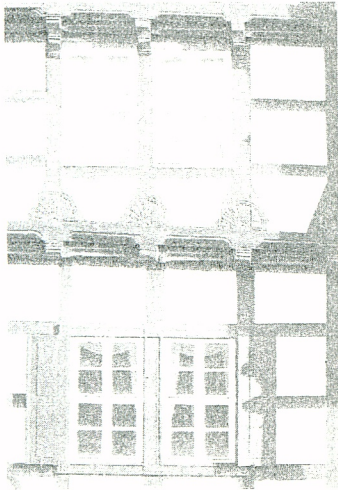


写真4 三角受木 (Konsoledreiecke) はドイツ木骨住宅の特徴である



写真5 木骨建築が並ぶ町クヴェットリンブルクの町並み

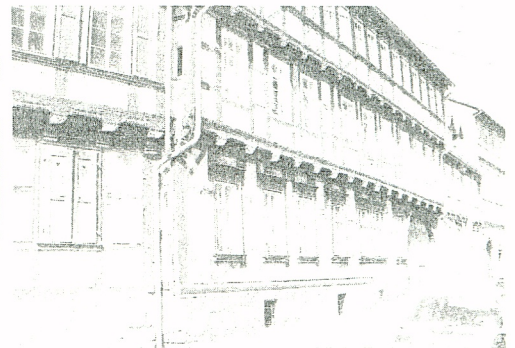


写真6 木骨建築が並ぶ町クヴェットリンブルクの町並み



写真7 木骨建築が並ぶ町クヴェットリンブルクの町並み



写真8 町のいたるところに改修の工事現場がある

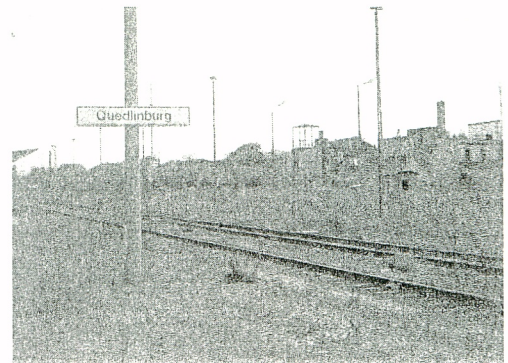


写真9 ドイツ鉄道クヴェットリング駅と旧自動制御工場の廃墟

出てくるが、これはハルツ山脈の山歩きである。当時は東西ドイツ統一前で旧東ドイツに入るのは困難であった。このときは旧西ドイツ側のゴスラー (Goslar) からハルツに入り山を登って、遠くこのクヴェットリンブルクの町を眺めた。すなわちこの町は東西ドイツの国境近くにあったのである。この時に是非クヴェットリンブルクの町を見たいと考え、実は統一後3回もこの町に足を踏み入れた。この町は旧東独時代には空気調和の自動制御機器を製造する工場があり工業都市でもあった。しかし統一後は西側の技術力には競争できず、工場群は駅の周辺に廃墟のようになって残っている。

□現在は木組みの町並みを観光資源として生きていこうとしている。ホテルも観光用に貸自転車を置いたり、世界からの客寄せに力を入れている。来るたびに町は確実に美し

くなっている。それだけに古い住宅の再生・保全に一生懸命で、修理・保全の専門業やその教育機関も見受けられる。改修保全では全て昔のままというのではなく、現在の建築材料も使用されている。ドイツの大学では建築学科の中に古建築の保全・改修の講座も存在し、その教育と研究が行われている。財建材試験センターが業務提携を行ったフラウンホーファー研究所も古建築の保全・改修に熱心で、建築物物理、衛生微生物といった観点から研究を行っている。またこの研究成果や助言がクヴェットリンブルクに残る中世の住宅保全、改修に生きている。

□わが国においても200年住宅が政策としても取り入れられている現在、本気で200年住宅を作るのか大いなる疑問もあるが、少なくとも住宅改修、保全分野の更なる発展が期待されよう。